

[006] 語文研究表紙奥付等

<http://hdl.handle.net/2324/10262>

出版情報：語文研究. 6/7, 1957-12-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



編集後記

○ 杉浦教授が逝かれて早くも九カ月、悲しかった思い出の数々を残して、今年も後旬日で暮れようとしている。亡くなられた当初、研究事務室前の暗い廊下を通る時など、あの肥満気味の体軀と柔和なお顔の教授が書画の巻物か何かを小脇に、今にもヒョッコリと現われて来られそうな幻覚に襲われたことであつた。だが、主を失つた研究室の扉は堅く、申も既に大方取り片付けられて、たゞ空虚と寂寥とが心の傷痕を今猶疼かせているかのようである。誠に私達にとつて思いもよらない悲しみと不幸の一冬であり、一年であつた。

○ 本誌は今亡き教授の追悼号として早くから計画にとりかゝり、遅くも九月には発刊の予定で編集を始めたが、止むを得ない諸種の事情からまたまた三カ月余り後れて

しまった。早くから玉稿を賜つた方々にはまことに申訳けない次第であり、杉浦教授も天国から「ぼくの追悼号まだでえへんのか」と呼び掛けていらっしやるような気がして何とお詫び申してよいやらわからない。ともあれ後ればせながら、六・七号合併として一往の形を整え得たことは、偏に各位の御寛恕と御協力の賜であつて、感謝のほかはない。巻頭の御遺影は原栄一君（大学院）の作、恐らく元気なお姿としては最後のものであろう。飾るに福田教授から頂いた追悼の文を以てし、続いて御生前特に厚き薫陶を蒙つた数氏の論文を掲げ、更に特別の御厚志による玉稿の数々を収めさせて頂いた。

○ 去る者は日々に疎しとかいうが、杉浦教授が七年の間わが九大国文学科に培養された学問の樹は大きく繁り、チラホラと蕾を綻ばし始めているし、やがて爛満の春を迎

えるのもそう遠いことではないであらう。さゝやかながら本誌一卷をまず天に在す御霊の前に献げて冥福を祈ると共に、教授の遺された学恩に対する敬仰と追慕の念を更に新たにしようと思う。

(一九五七、一二、二〇、春日和男)

第八号原稿募集

締切 昭和三十三年六月三十日

(四百字詰原稿用紙二十枚—二十五枚程度とする)

九月上旬発行予定

(こんどは遅らせないつもりです。宜しく。)

ぬ時代では益々困難な事である。で、此の方面の研究には歌学書と註釈書とが最も都合のよい材料である」こゝに併せ記して賛意と敬意とを表する。

註五 愚秘抄については新版羣書類従十三巻解題（福井久蔵博士）。

佐々木信綱博士日本歌学大系四巻解題を参照。

註六 古典註釈に現はれた語学的方法（日本文化叢考所収）

註七 「座句ノテニハニテ連続タル、留メ」をさす。大概抄はすべて書下しにした。

註八 顕昭、拾遺抄註に「アリニシ物ヲトハアリシモノト云フ詞ニ二文字ヲクハハタルナリ」（羣十三註）とある事は、やはり

「に」が死語化する傾向をもちはじめた例と思われる。当代に正しい用法は勿論あるが、歌においても「つ」との混用がみられる事教長註の訳例にも、その傾向がみられる事から「に」の死語化の傾向を推せられる。この「ぬ」は歌論にをはんぬとして扱われ、不のぬと区別せられた。

後記、本稿成るにあたり、終始御指導下さった福田良輔先生、数々の御教示をいただいた春日和男先生に厚く感謝申し上げます。また本学の鶴久、森山隆両先輩の御厚意を感謝申し上げます。

執筆者紹介

福田良輔	本学教授
大内初夫	鹿児島大学講師
白石悌三	本学大学院学生
遠藤康子	純心女子学園教諭
佐田智明	本学大学院学生
森山隆	本学助手
立川昭二郎	広島修道短大助教授
大原一輝	香川県主基高校教諭
井手恒雄	福岡女子大教授
瀬良益夫	金光学園高等学校教諭
瀬古 確	熊本大学教授
今井源衛	本学助教授